

対人援助施設における逸脱行為に対する〈枠〉の有効活用についての一考察

— 施設における職員へのインタビュー調査に基づいて —

京都市児童福祉センター青葉寮 野村理人

I. 問題と目的

平成11年度から始まった児童養護施設への心理職員の配置や平成13年度からの本格的なスクールカウンセラー配置など、近年心理臨床のフィールドは広がり続けている。茂木(2003)はそうした状況に対し「従来適用されてきた『枠』が通用しない臨床場面に遭遇する心理士の数も増えてきた」として児童福祉施設での心理士の課題を考察し、「伝統的な心理療法の枠組みから外れて混乱しているのは、子どもではなく、むしろ心理士の側であろう」と述べている。筆者自身、精神科クリニックに併設のフリースペースにおいて、不登校・引きこもりの心理臨床活動に従事した経験を持つが、言語を介した個人心理療法の適用されづらいクライアントのために比較的緩やかな枠を提供する環境において、逸脱行為等に何度も出会ってきた。そんな中で、施設における〈枠〉の機能や有意義な活用について考えることが多かった。しかしながら、こうした個人心理療法でも集団精神療法でもない形態で行われている対人援助施設における、治療・援助の枠組みに対する記述はそれほど多くはない。「枠を応用して行くためには枠の持つ機能を柔軟にとらえていかなければならないが、それは単に枠を緩めるということではなく、枠の持つ本来の意義から考えなおし、構築しなおしていく作業である」という茂木(2003)の指摘や、「施設における心理臨床では、生活場面での援助と個別の心理療法のそれぞれが精査されるとともに、その二つを統合した援助モデルの更なる展開が今後の課題となるであろう」

という森田(2001)の指摘といった問題提起にとどまっているのが現状である。そこで本研究では、「枠」の性格が最も浮き彫りにされるのはクライアントの逸脱行為に対する時であろうという考えのもと、集団を扱う対人援助施設における逸脱行為に対する「枠」設定について質的調査を試み、その意義や狙いについて考察したいと考えた。

II. 方法

1. 調査

平成22年3月から9月の間に、対人援助施設6施設において、計12名のワーカー・看護師・心理士に対して、施設におけるクライアントの逸脱行動とその対応に関する半構造化面接でのインタビュー調査を実施した。

1) 調査対象

施設A：児童養護施設 ワーカー2名、心理士1名

施設B：児童養護施設 ワーカー1名、心理士1名

施設C：児童自立支援施設 ワーカー2名

施設D：情緒障害児短期治療施設 心理士2名

施設E：精神科デイケア 心理士1名

施設F：精神科デイケア 看護師2名

2) 調査の内容

半構造化面接は、1人につき1回、60分を目安に行い、以下の項目について質問し、自由に答えてもらう形で行った。

a. 時間的なことに関して、決められた日課な

どを守らないクライアントがおられた際、どのような対応をなされましたか？

- b-1. 物理的なことについて、決められた活動場所を守らないクライアントがおられた際、どのような対応をなされましたか？
- b-2. 他の物理的なこととして、施設の備品や個人の所有物について、ルールを守らないクライアントがおられた際、どのような対応をなされましたか？
- c-1. 人的なことについて、職員との関係におけるルールを守らないクライアントがおられた際、どのような対応をなされましたか？
- c-2. 子ども同士の関係について、ルールを守らないクライアントがおられた際、どのような対応をなされましたか？

2. 分析の方法

分析はグラウンデッド・セオリー法に基づき、以下の手順で行った。

①第1段階では文章化したデータを切片化し、それぞれの切片化したデータを端的に表現する言葉によるラベルづけにより、コード化を行った(例:データ「守れないならデイケア中止になる」→ラベル〈厳しいペナルティ〉)。

②第2段階では、ラベルを付した各データについて「逸脱行動」に対する「枠づけ」であることに注目して取捨選択を行った。

③第3段階では、こうして得られた概念の中で類似したものを統合してカテゴリーを生成した。(例:〈ペナルティの枠〉〈表裏がなく分かりやすい枠〉〈分かりやすい枠〉〈あらかじめ救済措置の用意されている枠〉)。

④第4段階として、データとカテゴリーの間の往復を繰り返しながら、カテゴリーの統合を行った。(例:〈禁止とペナルティに囲まれているが、その中は裏表がなく分かりやすい空間になっており、救済措置も用意されている枠〉)。

その後、多くの人が見てすぐイメージできるようなカテゴリー名を変更しながら各カテゴリーのイメージの統一を図った。(例:〈柵と梯子が設置された、見通しがよく日陰がない屋

上のような空間を作り出す枠〉)。

⑤最後に第5段階として、生成されたカテゴリーからさらに大カテゴリーを作成した。

Ⅲ. 結果と考察

1. 生成されたカテゴリー

分析により、7つのカテゴリーが生成された。これら7つのカテゴリーをもとに『構造』『素材』『目的』という3つの大カテゴリーを生成した。また、分析において〈枠〉には該当しないため棄却されたカテゴリーの中から、上記カテゴリーと因果関係にあるため重要な意味を持つと思われたカテゴリーである〈枠のコーディネート(伸縮)〉、〈施設の文化(モデル)〉を、『効果』という大カテゴリーを用いて、残すこととした(表1参照)。

これら全体を図示したのが図1である。

各カテゴリーの定義を以下に示す(表2)。

2. 『構造』としての枠

大カテゴリーの一つ目、『構造』としての枠は、揺らぐことのない施設の土台や骨組みであるともいうべきものであり、個別に適用されるのではなく全てのクライアントに適用される。

1)「柵と梯子が設置された、見通しがよく日陰のない屋上のような空間を作り出す枠」(以下「屋上のような枠」と省略)

「屋上のような枠」は、分かりやすく、明らかであり、裏を考えなくてすむ、後腐れない環境を作り出す枠であるといえる。この枠を実現している施設においては、それぞれの個性や方向性はあるものの、クライアントがつい裏を考えて妄想を膨らませてしまいがちな物事に関して、情報を透明にすることによって、クライアントが裏を考えなくてすむような環境を作っている。

例えばスタッフのスケジュールが明示されることによって、クライアントは、スタッフ達が自分の言動とは関係のない、独自のスケジュー

表1 カテゴリーと大カテゴリー

カテゴリー	定義	大カテゴリー
〈柵と梯子が設置された、見通しがよく日陰がない屋上のような空間を作り出す柵〉 〈入れ子状に部屋が連なり、ドアを開けて行き来する柵〉	全てのクライアントがその中で過ごす、施設のシステム、環境、構造に関するもの。	= 構造
〈合板のような多層的なスタッフ集団という柵〉 〈コンクリート壁のような均質なスタッフ集団という柵〉	スタッフ集団が共同して行う対応によって作られるもの。クライアントにとってはスタッフと接した際の感触、手触りが重要となる。	= 素材
〈刺激を遮断する防音室のような柵〉 〈適切な壁を設置して境界線を作る柵〉 〈目標という敷居を作り、意識させる柵〉	クライアントの様々な力や特徴に対してその修正等を目的として適用されるもの。	= 目的
〈柵のコーディネート（伸縮）〉 〈施設の文化（モデル）〉	上記のカテゴリーと因果関係にあるもの	= 効果

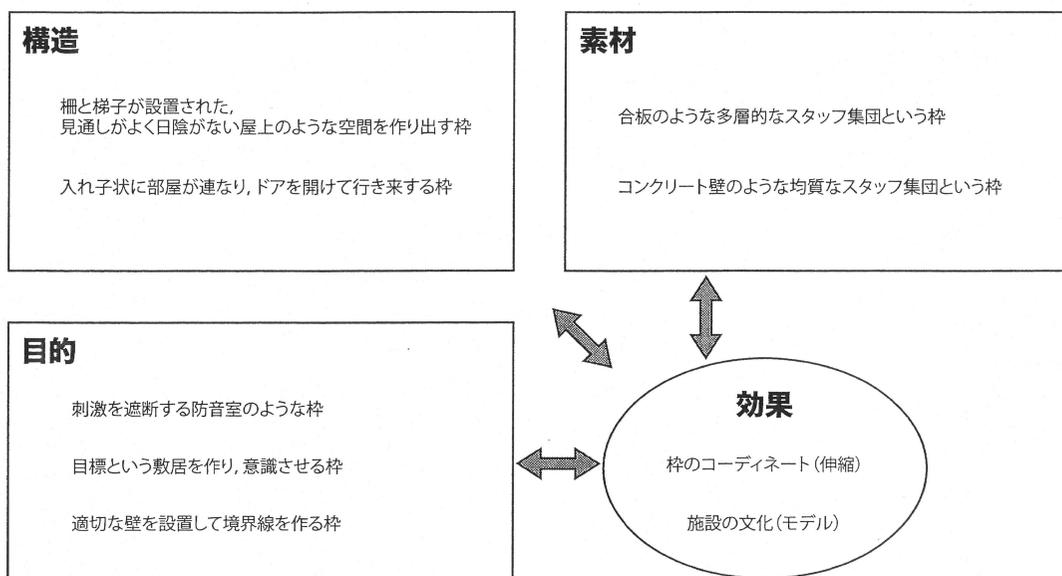


図1 大カテゴリーおよびカテゴリーの全体図

ルや都合で動いているのだということが体感される。そのことによって「あの人は私のことが嫌いだから用事を作って去って行ったのだ」といった関係念慮を防止することができる。あるいは、相談事も皆のいる場で行い、トラブルの際にはクライアントの病理についての説明を行うこともあるなど、クライアントの情報も必要以上に隠さないといった施設においては、クライアント同士の疑心暗鬼を防止することができ

る。

“柵”とは全体の禁止事項であったり個別に決められたルールや目標であったり様々であるが、それが分かりやすい形で設定されていることも同様に、何をなすべきか、何をやってはいけないかということを確認にする。クライアントはスタッフの顔を伺ったり、自分がスタッフから注意されたのは自分が嫌われているからだといった考えを起こさなくてすむように

表2 カテゴリーの定義

大カテゴリー	カテゴリー	定義
構造	柵と梯子が設置された、見通しがよく日陰がない屋上のような空間を作り出す枠	情報が透明で、分かりやすい場をつくる枠。日陰がなく、柵の存在も分かりやすいことによって、クライアントが何か裏があるのではと妄想的な思考を膨らませることを防ぎ、また、クライアントがその中で自由に行動できることを保障する。柵を越える逸脱行為に対して再び戻ってくるための梯子もわかりやすい形で用意されている。
	入れ子状に部屋が連なり、ドアを開けて行き来する枠	小さな部屋から次第に大きな部屋へと、ステップアップやダウンを繰り返しながら、少しずつクライアントの活動の範囲やバリエーション、接する人などが広がっていくように設定されている枠。各部屋には窓があり、クライアントは自分の次の段階を観察でき、あるいは不安になったときには元の部屋に戻ることができるという安心感がある。クライアントは連なる部屋の間を行き来しながら、時に広がり、時に小さくなりつつ、成長していく。施設の外側には、施設も包含する大きなケアの枠が連なる。
素材	合板のような多層的なスタッフ集団という枠	様々な役割の関わりを、それぞれのスタッフが行っていくことで、多層的で柔軟性と強度を兼ね備えた枠を作り出す。役割や関わり方は異なるが、情報や見立てを共有することが接着剤となり、合板としての強度が保たれる。クライアントは、一つの事態に対して様々な手応えを提供され多様な情緒的体験をする。厳しい目線からちょっと隠れる場所や、一時的な逃げ場もある。合板ゆえの柔軟性である。各々が一貫性を守ることによって、クライアントもスタッフも混乱しないで済むという効果もある。
	コンクリート壁のような均質なスタッフ集団という枠	施設全体、あるいはあるクライアントに関わる一部のスタッフ集団が、当のクライアントに対する情報や方針、関わり方などを厳密に共有し、皆で同じ対応をすることで、がっしりとしたコンクリート壁のような状態を作り出す。ばらつきや曖昧さのない明解さと、ほころびが生じない頑健さを実現している。
目的	刺激を遮断する防音室のような枠	クライアント本人が衝動などを自分ではコントロールできず、その為に本人や他のクライアントを傷つけてしまうなどする場合、本人と他のクライアントを護る為に、衝動などの元となる刺激を遮断するための枠が用いられる。また、刺激の遮断には、集団への影響や連鎖を防ぐという効果もある。
	適切な壁を設置して境界線を作る枠	クライアントとスタッフ、あるいはクライアント同士の間、適切な境界線を引くための枠。境界線を越えてきた際にはきっぱり断る、厳しく禁止するなどして作っていく。
	目標という敷居を作り、意識させる枠	施設に入所する際、あるいは施設内でセラピーを開始する際などに、目標をクライアントに設定させ、折に触れてそれを意識させることで、行動の修正や現在の状態を確認するための枠。敷居をまたいで施設(セラピー)に入った以上、目標を達成する、つまり閾値を超えない限り外には出られない、という意識を持たせる。目標からの逆算によって生活スケジュールを組み立てるという場合もあり、未来の目標のための今、という時間感覚をもたらす効果もある。
効果	枠のコーディネート(伸縮)	クライアントの行動は全て、何らかの内的過程即ち背景によって生じているという視点に立ち、その背景如何によって、枠の適用や強弱の配分等を組み立てる作業である。ここにおいて、枠は、柔軟に伸縮しつつクライアントに圧をかけたり逆に圧を抜いたりして、クライアントの形を整えていく陶芸家の手の平のような呼吸によって適用される。
	施設の文化(モデル)	これまで述べてきたような様々な枠によって、クライアントの行動が変化してくると、それが一つのモデルとして、他のクライアントに作用するようになる。さらにその状態が浸透すると、モデルは文化となり、クライアント同士が逸脱行為を注意しあうような集団の雰囲気へと成長していく。

なる。個別のルールや目標を、誓約書の形で皆の活動する場に掲示するという場合もあったが、この場合などはまさしく見ればすぐに思い出すという意味においても分かりやすい形であり、同時に、他のクライアントの誓約書もオープンになっているという点でも情報の透明度が高い。クライアントが柵に触れる、それを越えようとする際にはやはり分かりやすく禁止を伝えることも同様である。

逸脱行為を行ってしまった場合、つまり柵を乗り越えてしまった場合、一定のペナルティ(部屋で一人で反省する、施設利用を一定期間禁止するなど)が与えられ、スタッフとの話し合いなど、一連の手続きを踏んで、再び屋上に戻ってくることになる。そうした手続き、つまり“梯子”が分かりやすい形で用意され、きちんと実行されることは、クライアントの気持ちを後腐れの無い状態にしてゆく。

またこの分かりやすさは、クライアントのみならず、スタッフに対してもポジティブな効果がある。施設Fの場合、分かりやすい柵として、例えば普段はあまり姿を現さない施設長が現れて、施設の利用の禁止をクライアントに伝えていくという形をとっており、スタッフはいざという時には施設長がはっきり伝えてくれるという安心感がある、と述べていた。また同様に「多少ちょっと暴れちゃったり、暴言はいちゃったりという所で、どうスタッフが入って、その振り返りをして次にいかせるかという所」といった言葉に感じられた安定感や余裕も、柵と梯子がセットになって用意されていることによるものではないかと思われた。

2) 「入れ子状に部屋が連なり、ドアを開けて行き来する枠」(以下「入れ子構造の枠」と省略)

「入れ子構造の枠」は、クライアントの段階や状態にあわせて、様々な活動の形があり、それが入れ子状に幾重にも重なっている枠(図2参照)である。各活動の形を部屋に喩えたわけだが、これらの部屋にはドアがあり行き来できる

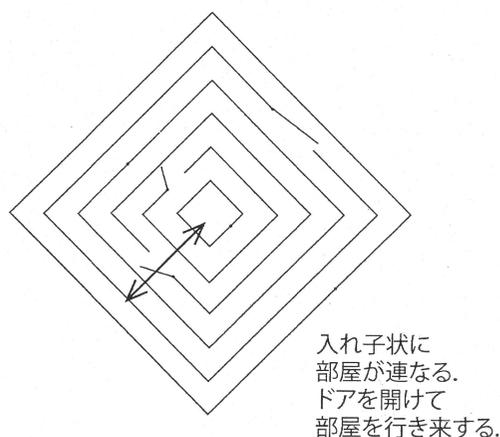


図2 入れ子構造の枠

こと、そして外の部屋の様子を見ることのできる風通しのよい窓があることが特徴である。クライアントはその窓から様子を見、観察しながら、自分の参加する部屋を選択することができる。もちろん参加した後に元の安心できる部屋に戻れもする。つまり安心感の保障された中で様々なことに挑戦して、力をつけると同時に自分の力量や個性、適性を確かめるといった、トライアンドエラーの作業ができる。施設Dにおいては、クライアントが次第に活動の場所を広げてゆく様子を、「一つ一つ権利を獲得していく」「ゲームでいうと武器やアイテムを手に入れて新たな洞窟に入っていく」という喩えで述べていた。

またこの入れ子状の部屋は、施設を越えて外にまで広がっていると考えることもできる。施設内に自分にフィットする部屋が見つからない場合などは、一旦児童相談所というさらに広い部屋に受け止められて、次の施設を探すという場合もある。また、施設Fにおいては、クライアントが施設を卒業した後もクライアント同士の間をつなぐのを支えにして行ってほしい、といったことが語られていたが、それは社会という枠の中で施設出身者が一つの部屋を作り、わずかかもしれないが施設との連続性を保ちながら活動している姿をイメージさせた。

3. 『素材』としての枠

構造という大枠の中に展開される人的環境である。ここでは、手触り、感触といったものが重要な要素になっているため〈素材〉とした。揺るがない〈構造〉とは違い、大きく二つの素材、「合板」と「コンクリート」が、状況やクライアントに応じて、それぞれの長所を活かしながら用いられる。

1) 「合板のような多層的なスタッフ集団という枠」(合板のような枠」と省略)

「合板のような枠」とは合板の中でも成形合板(プライウッド)と呼ばれる熱処理によって曲げなどの加工が加えられる柔軟性やしなやかさを持った合板のイメージである(図3参照)。ここでは、スタッフがそれぞれの役割や個性によって、クライアントに対してそれぞれ違った接し方をしている。その違いは、事前の打ち合わせによって決められる場合もあれば、打ち合わせなく行われる場合もあった。ここでは、クライアントの状況や背景といった見立ての情報を共有することが大切で、共有がいわば合板の接着剤となり、それぞれの板(スタッフ)がばらばらになってしまわないようにしていた。

役割としては、父性と母性の役割分担を初めとして、それぞれの得意分野を活かした先生のような役割分担や、兄弟のような役割などがあった。例としては、クライアントの問題行動の後、そのクライアントの担当スタッフとしては

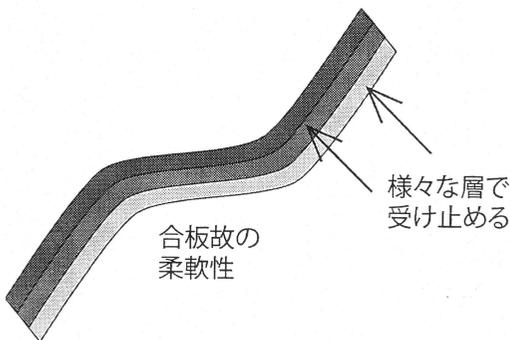


図3 合板のような枠

厳しい父性的態度を示すが、それだけでは関係がこじれていくといった場合には、他のスタッフには普段通りの接し方をしてもらってクライアントの逃げ場になってもらうというような場合、あるいは事前打ち合わせによって父性役と母性役を決め、父性役はクライアントの行動面にアプローチし、母性役は気持ちなどの背景にアプローチするといった役割分担などである。

父性と母性の役割分担とは、このような指導・教育とフォロー・受け皿といった機能だけではなく、別の角度から見てみると、そこではクライアントの「悩む力」を育てる作業が行われているものと思われる。井上(2008)は情緒障害児短期治療施設における被虐待児との関わりについて、「子どもたちは、まるで悩み以前の世界にとどまっているように感じる」と述べ、子どもたちのトラブルにおいて用いられる言葉が「相手への攻撃の道具」ではなく「第三者に自分を伝える道具」として用いられるよう変化することの重要性について以下のように考察している。「(第三者に自分を伝える道具としての)言葉の機能は、放っておいて勝手に育つものではなく、他者に寄り添ってもらったり、問題を解決したりしていく、いわば共同注視的な関係をもとにできていくのではないかと思われる(括弧内筆者)」「悩みとは、自分自身についての考察である以上、後者の言葉の育ちの後から生まれ出る」。母性役のスタッフが気持ちなどの背景にアプローチしながらクライアントの話聞いていく時、まさにこのような共同注視的な関係の中で、相手を攻撃する為の言葉ではない第三者に自分を伝える道具としての言葉を育て、悩み以前の世界から悩みの世界に巣立つよう働きかけているのではないだろうか。

「合板のような枠」の他の機能としては、一人のスタッフが厳しく接した後に態度を変えてフォローするというような接し方では、クライアントも混乱するし、スタッフの方も心が疲弊して壊れてしまうという話もあった。「合板のような枠」はこのように、クライアント・スタッ

フ双方の混乱を防ぐという効果もあるのであろう。また、逸脱行為にこだわらずに見た場合、父性や母性、兄弟、先生といった様々な役割のスタッフと接することは、多様な体験を提供するものと思われる。クライアントは様々な手触りの体験の中から自分にフィットするものを探したりモデルを見つけたり、逆に自分に合わないものを知ることでもできる。これらは皆、成長促進の要素になる。しかし同時に、このような多様さが対応のずれを生み、クライアントが付け入ってくる枠のほころびとなる危険性もある。

2) 「コンクリート壁のような均質なスタッフ集団という枠」(以下「コンクリート壁の枠」と省略)

「コンクリート壁の枠」は、クライアントの情報だけでなく、接し方や関わり方も統一し、均質で可塑性のないコンクリートのような壁を作り出す枠(図4参照)である。「合板のような枠」とは対称的に、手触りの多様さはなく均質であるため、クライアントが付け入る枠のほころびが生じる恐れは少ない。「合板のような枠」における「逃げ場」が、ほっと息をつくという程度に収まらずに、このスタッフに訴えればペナルティが緩和されるといった都合よく顔を使い分けてストレス発散や解消の場になってしまうようなクライアントの場合、逃げ場があることでいつまでも問題が解決しないことにもなりか

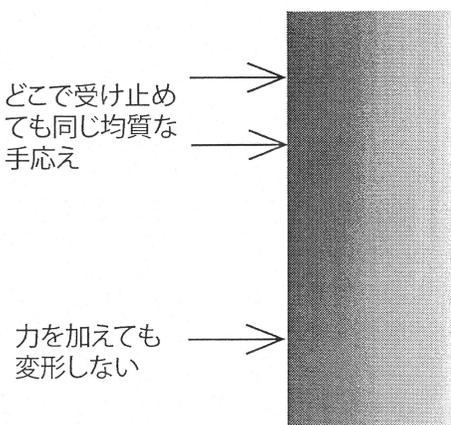


図4 コンクリート壁の枠

ねない。「コンクリート壁の枠」はこうしたクライアントの成長につながらない不健全な対処方略をとれない状態を作り出し、クライアントに困るべき問題に困ること、向き合うべき課題に向き合うことを要請する。このような強固な枠を作り出すためには、クライアントから「内緒にして」「秘密にして」というような訴えがあったとしても、きっぱりと断るというような態度や、スタッフの間で情報が行き渡っていない状態を作り出さないための努力が必要になってくる。この枠は、施設の職員全員で作り出す場合、クライアントに関わる一部のスタッフたちで作り出すケース、あるいは家庭での行動が問題である場合にはクライアントの家族も一緒に連携して作り出すというようなこともあった。

「合板のような枠」は、先に見たように、多様な経験をクライアントにもたらすことによって、悩む力を育てるなどの効果が期待できる、大きな可能性を持ったものであった。しかしそれは同時に、まさに多様なスタッフのアプローチ故の脆弱さを孕んでいる。対応を統一していない「合板のような枠」においては、例えばクライアントのファンタジーを元にした投影同一視に巻き込まれてしまう者も現れるなどの危険性がある。「コンクリート壁の枠」は、こうした「合板の枠」の脆弱性から、クライアントのみならずスタッフや施設全体を守るものでもある。

「コンクリート壁の枠」のもう一つの大きな効果は「分かりやすさ」である。スタッフによって対応が異なると、自分の行った行為が本当に悪いことなのかどうか、分からなくなるという事態も起こり得るが、そんな時にスタッフが一律に厳しい態度をとることで、自分の行った行為がどれほどの重大事だったのか、ということが非常に分かりやすくなる。

4. 『目的』としての枠

これらは、『構造』や『素材』といった環境とは異なり、クライアントの行動に対して個別に適用されていく枠である。それは、クライエン

トがもつ様々な問題、衝動コントロールや同調圧力に屈して一貫性や統合性を失ってしまうこと、自我境界、主体性や責任、時間感覚を持つことで一貫性を身につけることなどに対して用いられる。以下の3つカテゴリーが見出された。

1) 「刺激を遮断する防音室のような枠」(以下「防音室の枠」と省略)

「防音室の枠」とは、施設内において、刺激の少ない環境にクライアントを置くことによって、クライアント本人や集団を保護する枠であり、クライアントが自分ではコントロールできない衝動や感情などを、刺激を遮断することによって鎮める、いわばクライアント本人の代わりにコントロールする枠でもある。クライアントを実際に一人で部屋で過ごさせることで刺激を遮断する場合もあるし、そもそも刺激の多い活動の場を作らないという場合や、鍵の設置などの物理的な方法によって実現する場合もあった。

また、集団で活動する施設においては、一人または少数のクライアントの逸脱行動が、他のクライアントに影響し、逸脱行為が連鎖したり、集団全体が不安定な精神状態に陥ってしまう可能性もある。こうした連鎖を防ぐために、この枠が用いられることもある。そこでは、例えば複数のクライアントが問題を起こした場合にも、指導的な関わりは一人ずつ順番に行うといったケースもあった。これは複数のクライアントに同時に指導的関わりという強い刺激を与えることが、さらなる陰性感情の連鎖を生んでいくことへの配慮である。

2) 「適切な壁を設置して境界線を作る枠」

これは、施設ごとにその方向性や方略は様々であったが、スタッフとクライアント、クライアントとクライアントとの間に、互いに干渉しない、プライベートを侵害しない、といった適切な境界線が引かれるために用いられる枠である。他者との間に引かれる境界線は、自他の違いを明確にし自分を大切にする、同時に他者も大切にするという気持ちや、自分は自分であり

人と違っていいのだといった感覚をもたらすものである。

クライアントとスタッフとの境界線は、ここから先は立ち入り禁止という物理的な方法が用いられる場合もあるし、そのつど話し合って境界を作るという場合もあった。またクライアントが他のクライアントの個別のプログラムや課題設定に関して干渉するような言動を、特に厳しく注意していく、という場合もあった。

3) 「目標という敷居を作り、意識させる枠」(以下「敷居の枠」と省略)

「敷居の枠」とは、施設や施設内で行われる心理療法に入る目的、目標をクライアントとの話し合いによって、クライアント自身の納得の元で設定することで、以後、折に触れてそこに立ち戻って軌道修正等を行うための枠である。施設に入所する際、3回の見学を行い、入所するか否か、施設で自分がどう変わりたいかを確認するという場合や、セラピー導入の際にやはりアセスメントやお試しに時間をかけて、クライアントに目標を確認してから導入するという場合など、敷居(ハードル)を高く設定することで、クライアントの自覚や覚悟、主体性といったものを要求しているものと思われる。また、逸脱行為の後、再び日常の活動に参加する際にルールや目標を決め、それを誓約書の形にして活動の場に張り出したり、あるいは声を出して読むことで確認させたりする場合も、同様にクライアントの自覚を求めている。このように「敷居の枠」はスタッフが折に触れてそれを思い出させ意識させていくことが大切であり、逸脱行為などの問題があった際には目標設定と関連させながら振り返りや反省の作業が行われるのも、同様の配慮からである。またスタッフも、仮に形だけの納得であったとしても本人が設定した目標である「敷居の枠」があることにより介入しやすくなる。また介入の際にはポジティブなフィードバックも含め、クライアントの過去からの変化が確認されることによって、クライアントに時間の感覚が生じるということもあるで

あろう。施設Cにおいては、「門限やスケジュールは就労という目的によって自ずと決まる」というように、「敷居の枠」によって時間が構成されていくという。

5. 『効果』

大カテゴリー『効果』は、〈枠〉ではなく、これまで述べてきた様々な〈枠〉の運用やその結果に属するものである。施設における逸脱行為への対応を考えた場合に、重要なものであると思われたために『効果』という大カテゴリーで括り活かすこととした。

図1に示した『構造』『素材』『目的』とそれぞれの下位カテゴリーが、施設における〈枠〉を構成する要素である。図の矢印は運用と影響の二つの作用を表している。これらの要素が様々な吟味され運用されることで、クライアントごとにその個性に見合った適切な枠がコーディネートされる。またこれらの要素がクライアントの集団に影響を及ぼすことで、施設の文化といったものが醸成されていく。

1) 「枠のコーディネート（伸縮）」

クライアントの行動は全て、何らかの背景、即ち内的過程によって生じている。故に行動の結果、枠に触れたり、逸脱することになったとしても、その背景如何によっては、許される場合や、むしろ奨励される場合すらある。ここにおいて枠は、背景に対する見立てを元に、『構造』の中において『素材』『目的』のそれぞれの材料の中から、その都度クライアントに対してコーディネート、即ち吟味され組み立てられる。非常に強迫的に時間を守りつづけるクライアントが遅刻をした場合と、普段から非常にルーズで、故に集団を乱してしまうことの多いクライアントの場合では、同じ時間に遅れてくるという行為に対しては対応が異なってくる。時に、非常に広く自由度の高い枠でクライアントを見守るべき時もあるし、時には逆に、クライアントを力づくで押さえつけるというような強靱な万力のような抱擁が必要になる場合もある。あるいは

は、例えば「入れ子構造の枠」で言えば、クライアントがどのサイズの部屋で活動すべきかをスタッフが判断し提供することであり、「合板のような枠」「コンクリート壁の枠」のどちらを適用すべきであるかを判断し配置することである。

これは〈枠〉ではなく〈枠〉による効果としてのカテゴリーである。施設に用意されている様々な枠が、クライアントの背景への見立てによって、適用されていく。つまり、あらかじめ数多くの枠のバリエーションが用意、あるいは自覚されているほど、枠が柔軟に伸縮するという環境を実現できることになるだろう。

2) 「施設の文化（モデル）」

これまで述べてきた様々な枠や、そのコーディネート、スタッフの対応などによって成長したクライアントは、他のクライアントのモデルとして機能するようになっていく。さらにそうしたクライアントが多くなっていくにつれて、モデルという個人を超えた、場の雰囲気、施設の文化といったものが醸成されていく。そして施設の文化がクライアントたちに影響を与えていく。こうした力動は、集団で活動をする施設ならではのものであると思われた。ここにおいて、スタッフはそうした文化の醸成、普遍化を促進する役割を担うことになる。成長したクライアントを積極的に後輩のクライアントの世話や指導的役割にあたるように促していく場合や、逸脱やトラブルがあった際、他のクライアントの助言を引き出ししていくように関わっていく場合などがあった。

施設Dにおいては、施設内の学校に行かないクライアントに対して、他のクライアントはそれをうらやましがめるのではなく「学校行かなくて羨ましいんじゃないか、学校いけて俺は結構良いんだっていう、価値観が施設の中にある」という。また子ども同士で「あれはおかしいんじゃないか」「ちょっといきすぎだよ」と話し合うような、「育ちあい」ともいえるべき光景が展開されることもあるという。

また、施設Cにおいては「施設のストーリー」というものを大切にしているという。クライアントにそうした話を聞かせることで、例えば施設の備品一つ一つにも、それぞれの物語があることを知り、大切に扱うようになっていくのだという。そしてクライアント自身も、そうした体験の中から、ぶつ切りになっていた自分のストーリーを紡ぎ出すようになり、他者への共感性などが発揮されていくのだという。これなども施設の文化というものを直接的にクライアントに伝えていく関わりであろう。

IV. まとめ

今回の研究において、施設における〈枠〉とは『構造』『素材』『目的』という大カテゴリーの下、クライアントにあわせてコーディネートされることで作られる建築としてイメージできること、そしてそういったコーディネートの結果、施設には文化ともいべき力動が生じることが明らかになった。こうした視点は、今後〈枠〉について考えていく上で有用な道具となるものであろう。これらが、自らの施設がどのような建築であり、どのようなコーディネートが日々行われ、その結果どのような文化を育んでいるか、その建築においてできることできないことは何か、招き入れるべき人とそうでない人は誰なのか、等々の問題について振り返りまたリフォームしてゆくための道具として、いくらかでも寄与できれば幸いである。

〈付記〉

本論文は2011年3月に花園大学大学院に提出した修士論文を加筆修正したものである。調査先の施設をご紹介して下さり、論文をご指導頂いた橋本和明教授、調査先の施設をご紹介して頂いた丹治光浩教授、並びに忙しい日々の業務の間に時間を作ってください、調査に協力してくださいと多くの施設とスタッフの方々、見学の際暖かく迎え入れて下さったクライアントの

方々に、深く御礼申し上げます。

引用文献

- 井上真 (2008) : 悩み以前から悩みへ 被虐待児との関わりから—, 心の科学 (140), 101-104.
- 茂木洋 (2003) : 福祉心理臨床における「枠」, 四天王寺国際仏教大学紀要, 35, 1-9.
- 森田喜治 (2001) : 心理臨床家との連携 庄司順一, 西澤哲編 社会福祉基礎シリーズ 12 ソーシャルワーカーのための心理学